

親日国パラオと日本の関係

自分の力で進み出した。みるみるうちに成績も上がり、自分の目標も見えてきた。

そして、受験。自分を信じて最後まで諦めず、向かった一番に行きたかった競争倍率27倍の大学。運命の合格発表…。

みごと合格！自分の力で勝ち取ったと最高に実感できた。まず、最初に母親に伝えたくて、携帯のない時代、公衆電話を必死に探してかけようとするが、感情が高ぶりが、母親の声を聞いて、何にもしゃべれない。母親は、たぶん落ちたと察したらしく、「一年間よく頑張ったね…」とききたので、死にそうな声を振り絞って合格を伝えたことをよく記憶している。

いままで45年生きてきて、いろんな人と出会って、何か自分が変わる瞬間があると感じている。自分にとってのそのターニングポイントには、まさに19歳の時。そこで学んだことは二つある。

一つは、夢とか希望とか、明確でなくてもよいので、いま目の前にあることに一生懸命に取り組むこと。勇気を出して一歩踏み出していくと、必ず自分の進むべき道が見えてくるということ。

もう一つ。自分はダメ人間じゃないということ。今の自分に自信がなくても、いまこうやってここで話している自分にとって、あの19歳の時の孤独感、挫折感、失敗したこと、全部財産に、自信になつていく。今の自分に全部必要だったことだと思える。自分がダメ人間だなんてことは絶対にない。

成功という言葉の反対は「何もしない」。世の中の成功している経営者やスポーツ選手など、必ず失敗を繰り返していると思う。失敗なくして成功はありえない。失敗は誰もしたくないし、避けたい、でも、失敗も成功もたぶん、同じ方向を向いている。失敗とうまく向き合っていけば、成功に近づいていけると思う。それを遠ざけるのは、「何もしない」ということ。

夢や希望がなくても大丈夫。自分に自信がなくても大丈夫。今日の森源太さんのライブ、メッセージを聴いて、気持ちも動き出したら、明日からゆっくりでも前に一歩、歩き出してほしい。(おわり)

青い海の色に黄色い満月、日本の日の丸とそっくりなデザインのパラオ国旗。そのパラオ国旗の由来をみなさんはご存知ですか？パラオは小さな島国ですが、その8割以上の国民が未だに親日家です。

大正8年(1919年)にヴェルサイユ条約(対ドイツ講和条約)が結ばれ、日本はパラオを含むドイツ領南洋諸島の委託統治権を得た。日本はたたくさんの移民をこの地に送り、公立学校や医療施設を作り、稲作やパイナップルの生産を促した。

パラオのハイスクールで使われている歴史教科書には、こう記されている。『日本の教育の注目すべき効果のひとつは、授業の成績を重視することだった。生徒がどの民族に属し、

どんな身分なのかは無関係だった』日本人であろうと先住民であろうと平等に努力した者を評価していた。

太平洋戦争のとき、パラオのペリリュー島には日本軍の陣地が作られた。老人は村の若者達と共にその作業に参加した。日本兵と仲良くなって、日本の歌と一緒に歌ったりしたという。

しかし平和な日々は長く続かず、しだいに戦況は日本に不利となり、米軍は対日包囲網を圧縮。そして、ハルゼー大將が指揮する第三艦隊約八百隻の艦艇、総兵力四万二千がこの地にやって来た。

これに対するペリリュー島を準備する日本軍は、水戸の第十四師団座下の歩兵第二聯隊を主力とした地区隊(隊長・中川州男大佐)一万二千名。日本軍はペリリュー島が壮絶な戦場になることを予見し、船舶の乏しいなか、民間人を犠牲にしてはならぬという判断により、ペリリュー島民の強制疎開の実施を決定。

しかし島民達は仲間達と話し合い、代表数人と共に日本の守備隊長のもとを訪れた。『自分達も一緒に戦わせてほしい』住民代表達のその言葉を聞くなり、隊長は激高し叫んだという…

「帝国軍人が、貴様ら土人と一緒に戦えるか！」

「日本人は仲間だと思っていたのに…、見せかけだったのか…」

島民達は裏切られた思いで、皆悔し涙を流した…。そして、空襲を避けるため夜に行われた強制疎開。

日本兵は誰一人見送りに来ない。悲しみと悔しさに打ちのめされた村の若者達は、悄然と船に乗り込んだ。しかし、船が島を離れた瞬間、日本兵全員が浜に出てきた。

そして一緒に歌った日本の歌を歌いながら、手を振って彼らを見送った。先頭には笑顔で手を振るあの隊長がいた…。その瞬間、彼らは悟った。あの言葉は、自分達を救うためのものだったのだと…。

そして、42000対12000。兵力14倍、航空機200倍以上、戦車100倍、重火砲1000倍、圧倒的劣勢の戦いが始まる。既に制海・制空権を手に入れている米軍は、狭い小島に絨毯爆撃と艦砲射撃。

九月十五日、航空母艦を含む機動部隊を背景に、上陸作戦を敢行。2度までなんとか上陸を阻止するも、米軍の圧倒的物量にはやはり耐えられず、3度目には上陸されてしまう。

上陸を許してからは、五百の洞窟にこもって、持久戦に移り、連日連夜の攻防が続く…。しかし弾丸や食料の補給が途絶えた日本軍に望みは薄く、成す術も無く死傷者は増えていった…。

十一月二十四日、健在者は僅か五十数名にまで減ってしまった日本軍は、いよいよ全軍玉砕を覚悟した。中川大佐、村井権治郎少将、飯田義崇中佐、三人は、それぞれ古式に則って割腹自決。三人の最期に続けと、最後の決死隊が組織され、根本甲子郎大尉以下、傷だらけの五十五名は、夜の闇に向かつて突撃していった。

軍旗も機密書類も焼却したことを意味する最後の電文…「サクラ・サクラ」。

これが、パラオ本部に届いたのは、二十四日の十六時。この六文字の電文は、ペリリュー守備隊全員が、桜花のごとく散ったことを意味した。

圧倒的に優位な米軍は、この島を3日間で制圧できると目論んでいたが、日本兵は実に73日間も持ちこたえた。そして戦いが終わり、疎開からペリリュー島に帰ってき

た島民達は、その光景に愕然とした。島一帯に散乱する日本兵の死体、共に暮らし、共に歌い、同じ釜の飯を食べた者達の無残な姿。

そして、日本兵には見向きもせず、自国民の遺体だけを整理するアメリカ兵。島民達は涙を流し、こぞって日本軍の兵士達の遺体を埋葬したという。

「この島を訪れる、もろもろの国の旅人達よ。あなたが日本の国を通過することあらば伝えてほしい。此の島を死んで守った日本軍守備隊の勇気と祖国を憶うその心根を…」

そう。パラオの国旗は日本という国に敬意を表し、日本国旗『太陽』に照らされて洋上に輝く『満月』を表したものだ。満月を旗の中心に置くとあまりにも日本に似すぎていて失礼にあたると、満月は少しずらしてデザインされている。

このことを日本人は忘れてはいけないだろう。私は過去の日本人を誇りに思う。そして先人に恥じないよう今の日本を変えていこうと思う。

(ユーチューブ「親日国 日本とパラオの関係を知って!」より)

天皇、皇后両陛下が、戦後70年となる来年2015年、戦没者慰霊のため、先の戦争で激戦地となったパラオなど太平洋諸島の国々を訪問される方向で宮内庁などが検討していることが発表されました。両陛下が長年続けてこられた、国内はもとより、遠く海外で命を落とした戦没者への慰霊の深いお気持ちが強く感じられます。

「すべては借り物 天国へは

何も持っていない」

重大事故で病院に運ばれ、家族には助かる見込みはほとんどないと伝えられた方が、死の淵で幽体離脱の経験を経て、2つのことを思ったそうです。

ひとつは「自分が死ぬんだ」ということ。いつの日か、自分の人生にも終わりがくる。それは、明日かもしれないし、50年先かもしれない。

もうひとつは「自分の物など、なにひとつない」ということ。もしも、それが自分の物ならば、家も、土地も、貯金も、肉体も、そして奥さんや子どもも、天国に持っているはず。でも、なにひとつ持っていないことはできなかった。

すべては、この世に在る間の借り物で、奥さんや子どもはただ、そばにいてくれていただけ。そんなことに気づいたそう。形あるものはなに一つ持っていないことはできない。

肉体を離れて天国に持っていけるのは、形のない「思い出」だけ。だから、形や物に執着しないで目に見えない「思い」や「嬉しい気持ち」を見ようとすると、なにが大切でなにが必要じゃなかが見えてくる。お金も才能も使わなければ持ちぐざれになつてしまうから、喜びのために使つて、人生を楽しもう。

「やさしすぎる君へ」(てんつくマン) サンクチュアリ出版

地域に根ざして

当社エリアの田村地区の自治会の方からお声がけをいただき、先月9月20日、田村自治会館にて講演をさせていただきました。毎年秋季に行っている社協・一般福祉部会主催による「社会を明るくする運動」の講演会で、「こころと体の健康法とは？」というタイトルでお話させていただきました。

お話しした内容は、昨今増えてきた書籍や講演などによる新たな健康情報(医療や薬、食品添加物、電磁波等)は果たして真実か?ということと、自分が実践してきたこころと体の健康法についてです。

依頼のきっかけは、発行を続けてきたこのミニコミ「ひらほく新聞」。質疑応答でもコメントいただきましたが、とても多くの方が楽しみに見ていただいていたことに、こちらも本当に有難く、嬉しく思いました。これからも顔晴って発行を続けて参ります。

素晴らしい機会をいただき、ご縁に心より感謝いたします。今後もっと地域の皆さんに深く関わり、できることでさらに協力していかなければと実感いたしました。今後ともどうぞよろしくお願いたします。

